

白夜の国々 春夏秋冬

ーストックホルムセンターだより 第 15 号ー

日本学術振興会 スtockホルム研究連絡センター
Japan Society for the Promotion of Science - JSPS Stockholm Office



本ニュースレターも 15 号に達しました。歴代スタッフの努力のおかげで、北欧学術の現状が簡潔に紹介され、たいへんユニークで貴重な情報誌となりました。これまでは単に「ストックホルムセンター便り」としてきましたが、「名は体を表す」ともいいます。せっかくの内容ですから、もう少し、語感のなめらかなタイトルを、ということになり、本号から表記のように改めました。ご愛読いただければ幸いです。

目次

1. はじめに

2. スtockホルムセンターの行事・関連イベント

- ・ 第 7 回サイエンスフォーラム「Laser and Nano Technology」の開催
- ・ JSPS Alumni Club in Sweden セミナー「Linné and the Classification of Plants」の開催
- ・ Jan Sedzik 博士主催「Molecules: Aggregation, Nucleation and Crystallization」開催

3. ニュース・トピック

- ・ 飯島澄男教授 Gregori Aminoff Prize 受賞
- ・ スtockホルム大学電子顕微鏡センター開所と大学紹介
- ・ カロリンスカ医科大学と日本の大学、理研との協力
- ・ 「トップ・ユニバーシティ」構想
- ・ 教育・研究省のプレス記事—Madeleine Sandström 氏が研究助成に関する調査官に任命される
- ・ Anders Flodström 教授がスウェーデン高等教育庁のトップに

4. 北欧学術機関の紹介

- ・ Swedish Foundation for Strategic Research

5. 雑記帳

- ・ スウェーデン生き物日記 (1)
- ・ コラム「ストックホルム大学」
- ・ 国際協力員からのご報告

1. はじめに

北欧—その日その日（1）特任大使

「赤信号、みんなで渡れば怖くない」

賛否両論をまき起こした一言だが、アメリカやフランスでは、赤信号は一人で渡っても怖くない。逆に中国では青信号でも怖い。さすがに、アメリカでは事故が絶えないので、信号無視の歩行者には反則切符を切ることにした、という州もでてきたらしい。交通ルールひとつを見ても、お国柄がみえてくる。

スウェーデンの場合、赤信号で待つ人と渡る人の割合は、丁度、半分づつのようだ。青年、壮年たちは自動車が来ないかぎり、堂々と渡っていくのはフランス並みだが、子供や年配の人たちは、忠実に青信号を待つ。なにやら日本的である。

「スウェーデンは欧州の中の日本である」という話題が飲み会ででた。だいたい、南北に長く、冷温帯に位置する。バイキングは欧州に攻め込み、倭寇は中国を荒らしまわった。ロシア相手に大戦争をした。魚料理が大好き。約束の時間は必ず守る、ダークスーツを好んで着用。根回しに徹底し、会議は「異議なし」で無事、終了する。「だから」とスウェーデンの紳士たちは言う「仲良く国際交流に励もうではないか」。

スウェーデンには大学が 49 校あり、7 校がいわゆる伝統のある総合大学といわれる。王立工科大学はそのうちの 1 校で、ストックホルムを中心に大きなキャンパスを展開している。最近では、ストックホルム大学と提携して、王立工科大学・情報技術大学を開設した。国際交流にはことのほか熱心で、スタッフにも外国人が多い。あまつさえ、中国では Zhejiang（浙江）大学、Fudan（復旦）大学と協力して、共同教育研究センターを設置した。こうした努力が実ったのかどうか、博士課程学生の半分以上が諸外国からの留学生という。

「アメリカもそうだけれど、そんなに外国人学生を受け入れて、どんなメリットがあるのだろうか」いささかぶしつけな質問をしてみた。

「外国との交流は大切である。特に開発途上国への技術移転は、長期的な援助としてもっとも有効である」このあたりのせりふはどこでも聞かれ、公

式見解とでも言うべきか。

「でも、お金もかかるし、スウェーデンにとってそんなにいいのかな」とさらに失礼を重ねる。「将来の特任大使を養成するようなもの。親スウェーデンの人たちが世界に広がれば、それに勝る国益はないだろう。平和のためにも」

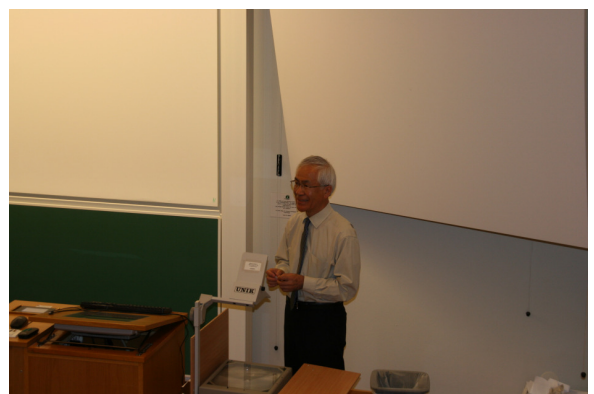
多分、これが本音だろうと思う。100 年先を見通した長期平和計画の一部と理解した。とすれば、人的交流を基礎とした国際化はスウェーデンだけでなく、全世界の国々が第一に取り組むべき課題であろう。

＊

日本学術振興会の多様な仕事のうち「国際化」は、おそらく、もっとも重要な課題のひとつと思う。そのためには、日本と諸外国の研究者たち、特に若い年代、がこれまで以上に気軽に相互往来できるようなシステムが欲しい。「大学間で締結する教育研究交流協定がその基礎になる」スウェーデンの各大学の担当者は例外なく主張する。「ただ、日本との例は少ない」とも言う。

ストックホルム研究連絡センターとして、双方の大学に情報を提供し、こうした協定をできるだけ多く結べるよう、促し、お手伝いしようと思う。そのことで、赤信号がとりはじめた地球環境変動を青信号に変換できるものなら、望外の幸せです。

（佐野 浩）



Alumni club セミナーで挨拶する佐野浩センター長

2. スtockホルムセンターの行事・関連イベント

第7回サイエンスフォーラム「Laser and Nano Technology」の開催（2007年6月18日 Kista）

当センターでは、2001年の開設以来、毎年度サイエンスフォーラムを開催し、日本のトップレベルの研究を当地に周知するとともに、当地の先進的な研究動向を探っています。20世紀後半の光科学はレーザーによって飛躍的に進歩し、物理学、化学だけでなく、生物学、医学、工学にも浸透し、21世紀に入りその研究はさらに加速していることを踏まえ、今回のフォーラムでは、社会に広くインパクトを与え続けている研究として、「レーザーとナノテクノロジー」を取り上げました。

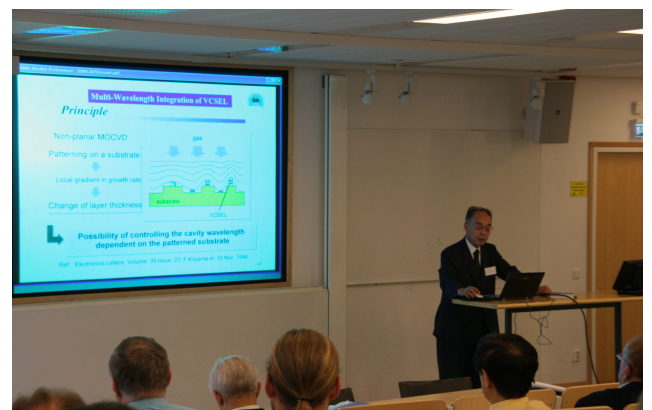
佐野浩センター長の挨拶で開会となった後、当会理事でもある伊賀健一東京工業大学名誉教授が、冒頭 JSPS の主要事業の概観を紹介した後、面発光レーザーを発明したときの状況及びそれ以降データ通信など様々な形で応用されている概要について講演をされました。その後のセッションでは、西澤潤一首都大学学長が、非常に効果的な発光ダイオードの進展に貢献してきた数多くの研究成果について、共催機関の東京工業大学の小山二三夫教授は、面発光レーザーを利用した数多くの応用面での成果について、それぞれ講演されました。一方、スウェーデン側では、当地における無線光通信や面発光レーザーの応用例や、将来のナノテクノロジーの基礎となりうるナノワイヤーなどについて講演が行われました。

フォーラムが開催されたストックホルムの北約12kmにあるシスタ（Kista）では、光通信の分野

において、日本との研究者交流・研究協力の成果を基に多くの研究者が起業しており、そのうちの一人である Dr. B. Broberg が日瑞の研究協力の重要性を話して講演会は終了しました。今後とも、スウェーデンを始めとする北欧諸国で行うのに相応しいテーマで講演会を行っていきたいと考えております。（大月 光康）

【講演者一覧】

西澤潤一	首都大学東京学長
伊賀健一	東京工業大学名誉教授
小山二三夫	東京工業大学教授
Anders Karlsson	王立工科大学教授
Fredrik Laurell	王立工科大学教授
Lars Samuelson	ルンド大学教授
Anders Larsson	シャルマーシュ工科大学教授



講演する伊賀健一東京工業大学名誉教授



質問に答える西澤潤一首都大学東京学長



夕食会に参加した後の講演者等



Ehrensård, 1740 © KVA.

6 月 8 日に JSPS Alumni Club in Sweden 主催のセミナー「Linné and the Classification of plants」がウプサラ大学で開催されました。2007 年は Linné 生誕 300 年にあたるため、スウェーデンでは様々なイベントが行われており、今年度は Alumni Club もセミナーに Linné を取り上げるようになりました。

佐野浩センター長が挨拶及び JSPS の事業説明を行った後、セミナーが開会しました。まず、Prof. Roland Moberg によって Linné 自身の生い立ちや「Systema Naturae」の考案に経った経緯、弟子たちとの関係について講義が行われました。次に、「How is being a plant taxonomist today?」という講義を Prof. Magnus Lidén が行い、その後 Mr. Christer Engström が Linné の研究に基づき編集された本「Nationalnyckeln」を紹介しました。最後に、本セミナーのオーガナイザー Prof. Göran Thor は、日本での研究中に皇居庭園を調査した貴重な経験を基に自らの「囊菌類」研究についての発表を行いました。

午前中のセミナーの後は、通常は年間 20 名程度の入室しか許可されないという Museum of Evolution にある Carl Peter Thunberg の標本室を見学することができました。Thunberg は、Linné の弟子で、1775 年に日本の出島にオランダ商館付の医師として赴任した人物です。当時の日本は鎖国していたため、Thunberg が商館を出て植物の採集をすることは許されませんでした。1776 年に江戸へ参府



Thunberg の標本室にて貴重な標本を見学

した際の道中で草花を採取したというエピソードも聞くことができました。

標本室には Thunberg が日本やインド、アフリカ諸国から持ち帰った草花の標本集が書架に並び、彼が愛用していたという顕微鏡やその当時の出島の風景画も展示されていました。標本の中も見せていただいたのですが、300 年近く経っているとは思えないほどの良い保存状態でした。

Museum of Evolution から徒歩で 20 分程離れた場所に Linné garden があります。この庭は、Linné 自身が設計したもので、二分法、季節、環境によって植物が分けて植えられています。庭の敷地内には Linné が二年間生活したという家も残されており、庭を見渡せる Linné の部屋にいて、当時の彼の研究や執筆活動の様子を想像することができました。

参加した Alumni Club のメンバーは、Linné の研究についてはもちろん、彼の生涯、日本と深いつながりを持っていた弟子の Thunberg についても感銘を受けた様子でした。講義の後、実際に Museum of Evolution や Linné の庭や家を見学できたことも参加したメンバーにとって素晴らしい機会となりました (真栄城 利江)。



Linné garden の案内を受ける参加者たち

Jan Sedzik 博士主催「Molecules: Aggregation, Nucleation and Crystallization」開催 (2007 年 4 月 23 日～27 日 Solna)

JSPS フェローシップ受給経験者で組織される Alumni club in Sweden の幹事の一人であるカロリンスカ医科大学の Jan Sedzik 博士主催の集中講座が、「Molecules: Aggregation, Nucleation and Crystallization」と題して、4 月 23 日～27 日まで同医科大学のソルナキャンパスで開催されました。

この集中講座は、タンパク質の結晶構造解析等の傑出した 15 名の専門家の講義のほか実習から成り立ち、当オフィスは MARIE Network、Karolinska Institutet Education AB などとともにスポンサーとして、産業技術総合研究所の安宅光雄細胞分子機能研究グループ長の招聘に協力しました。

講座は、主催者である Jan Sedzik 博士の挨拶で始まり、続いて当オフィスがスポンサーとして、JSPS のフェロシッププログラムについて説明しました。

専門家の講義の一つとして、安宅光雄博士は、構

造生物学の発展には良質のタンパク質結晶の作成が鍵となっており、また、重力パラメータはタンパク質結晶の質を支配する例が知られていることから、磁気力を利用して極限環境を生成し、その中でタンパク質を結晶化し、重力値の変化が結晶成長に及びメカニズムを解明するとともに、良質の結晶の合成に役立てた御自身の研究成果について、分かりやすく説明され、本集中講座の 20 名余りのポストドク、博士課程からたくさんの質問を受けていました。

Jan Sedzik 博士によると好評を博したので、来年は規模を大きくして開催することを計画中とのことです。(大月 光康)

(参照)

カロリンスカ医科大学のタンパク質結晶構造解析施設のウェブサイト

<http://ki.se/corefacilities/pcf>



他の同窓会員と談笑する Jan Sedzik 博士 (右から二人目)



安宅光雄博士と筆者



JSPS フォローシップ事業を説明

3. ニュース・トピック

飯島澄男教授 Gregori Aminoff Prize 受賞

飯島澄男名城大学教授（NEC 特別主席研究員、産業総合技術総合研究所ナノカーボン研究センター長）が、スウェーデン王立科学アカデミーから、「カーボンナノチューブの構造解析の研究」により、今年の Gregori Aminoff Prize を欧米以外の出身者として初めて受賞され、授賞式・記念講演会が 6 月 13 日、14 日と同アカデミーで開催されました。

Gregori Aminoff Prize は、結晶学の分野における貢献に対して、個人又は 3 人以内のグループに贈られる 1979 年に創設された賞で、王立科学アカデミーが授与している数多くの賞の中でも格が高く、1993 年の受賞者である Clifford Shull は、翌年ノーベル物理学賞を受賞しています。

飯島教授は、前日のストックホルム大学での講演

では、カーボンナノチューブのみならず、その発見前に打ち込んでこられた電子顕微鏡での仕事についても 1980 年代のストックホルムでの研究生活も含め非常に楽しそうに話しておられました。アカデミーでは、その高度な電子顕微鏡技術を使っのカーボンナノチューブの発見、その構造等について講演時間の大半を使って説明されました。

飯島教授は、今年度の藤原賞も「少数原子集団の構造解析とカーボンナノチューブの発見」により受賞され、その授賞式のため 14 日にはストックホルムを立たれ日本に戻られました。世界中から注目されている飯島教授には、ゆっくり休まれる時間はなさそうです（大月 光康）。

ストックホルム大学電子顕微鏡センター開所（2007 年 6 月 12 日）と大学紹介

6 月 12 日に Stockholm University Electron Microscopy Center の開所式が行われました。このセンターの開所にあたって中心となったのが Dept. Structure Chemistry の寺崎治教授です。寺崎教授は「このセンターの開所にも多大な時間と労力が必要でしたが、今後はこの施設を生かした研究を進め、その成果を出していくことが大切です。」と今後の研究への熱意をお話してくださいました。

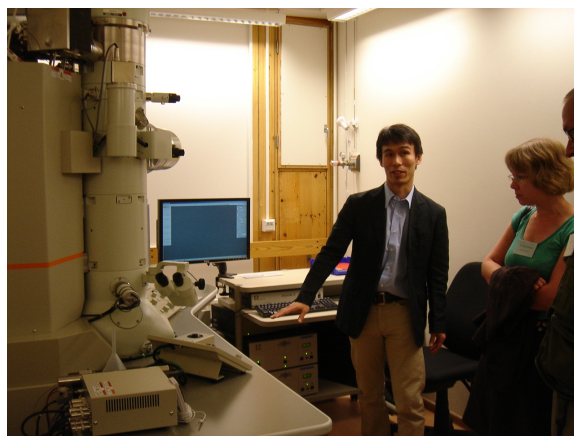
開所を記念して、名城大学（産業技術総合研究所、NEC）飯島澄男教授以下 7 名の研究者が講演をなさいました。飯島教授の講演は「High resolution electron microscopy and carbon nanotubes」とい

う題で、先端研究者の講演を聞こうと、会場は学生や研究者で満員となり、次々と質問が出る活発な講演となりました。

午前の講演の後、Electron Microscopy Center 見学ツアーがあり、一般の参加者にもセンターの内部を見学する機会がありました。顕微鏡が設置されているフロアーはセンターや階下とは分離した構造になっており、床を支える支柱は地面から直接センターを支えているという大がかりな構造になっていました。設置された顕微鏡も規模が大きく、訪れた研究者達はその仕様や性能について質問しながら見学していました（真栄城 利江）。



飯島澄男教授の記念講演



電子顕微鏡センター見学ツアー

カロリンスカ医科大学と日本の大学、理研との協力

2005 年 10 月の大学学長団の訪問を一つの契機として、日本の大学とスウェーデンの大学との大学間交流協定が増えてきておりますが、本年に入って、カロリンスカ医科大学と協定を結ぶ日本の大学、公的研究機関が目立っています。慶應義塾大学が協定を締結するとともに、グローバル COE に選ばれた「In vino ヒト代謝システム生物学拠点」における海外の研究拠点として連携を深めることとしているほか、日本医科大学が協定を締結しました。

また、理化学研究所は 2004 年 10 月の包括協定締結を具体化させ、脳科学総合研究センターが研究者及び大学院生の養成を目的とした共同プログラム設置のための協定をカロリンスカ医科大学と締結しました。

一方、同医科大学によると、博士課程の学生の約 3 分の 1 は、スウェーデン人以外で占められており、大学院生や客員研究員がスウェーデンや大学での

生活に慣れるよう、説明会を開催したり、ヨーロッパの大学と博士課程のカリキュラムの共通化に取り組んでいると同時に、アジアにおいて、進行中の博士課程学生交流プログラムを実施するためのシンガポール国立大学にある事務所に加えて、スウェーデンの王立工科大学及びシャルマーシュ工科大学と協力して、北京大学と上海の復旦大学に事務所を最近設置したとのことです。

同医科大学のキャンパスでは現在でも日本人より中国人の方が断然多く、今後もこの傾向は変わらないと思われますが、今後、慶應義塾大学、理化学研究所等を始めとする連携が活発になり、後に続く大学が増えることを当オフィスとしてサポートしていきたいと考えております（大月 光康）。

「トップ・ユニバーシティ」構想についてーフィンランド政府が“Top University”を創設へ

2007 年 4 月 19 日に発足したフィンランドの新政府は、同国の競争力を高める施策の 1 つとして、“Top University”の創設構想を盛り込みました。同大学は、ヘルシンキ工科大学、芸術デザイン大学及びヘルシンキ商科大学を統合して創設することとしており、その目的は、世界トップレベルの研究大学の基盤を築き、得意分野において最高の成果を出すことです。

新大学は、工学分野で約 1 万 5 千人、経済学の分野で約 4 千人、芸術デザイン分野で約 1500 人の合計約 2 万人の学生を抱えることになります。

3 大学は現在 1 億 7 千百万ユーロ（約 273 億 6 千万円、1 ユーロ＝160 円で計算）大学支援経費を受けるとともに、外部資金を 1 億 1 千万ユーロ（約

176 億円）獲得していますが、2012 年までに予算を 2 倍にすることとされております。

スウェーデンの王立工科大学においても、新大学はフィンランドを代表する大学となり、世界の著名な大学と並んでトップレベルの研究を行い、1945 年に Artturi Virtanen が化学賞を受賞して以来 ノーベル賞科学 3 賞の受賞者がいない同国に、定期的にノーベル賞をもたらすのではないかと報じております。（大月 光康）

参考 1：フィンランド新政府計画の合意について（合意の内容はフィンランド語）

<http://www.vnk.fi/ajankohtaista/tiedotteet/tiedote/en.jsp?oid=190681>

参考 2：現在フィンランドを代表する大学であるヘルシンキ大学については、

ストックホルムだより第 13 号を御参照下さい。<http://www.jsps-sto.com/>

Madeleine Sandström 氏が研究助成に関する調査官に任命される（2007 年 6 月 20 日）

スウェーデン政府はスウェーデン防衛研究所 (FOI) 最高責任者の Madeleine Sandström 氏を研究助成機関及び助成システムの調査官に任命しました。Madeleine Sandström 氏は過去に VINNOVA の副長官や Medical Research Council (MFR) の事務総長を務めた人物です。この調査は、現在の研究助成が、スウェーデン政府が掲げている「世界最高水準の研究」の達成に向けて適切になされているかを確認するために開始されるもので、研究費の助成システムを改善すべきであるか、改善する場合、その改善点や新しい研究費助成システムをどのように構築するかを検討することも職務に含まれています。

また、スウェーデン政府は国の研究助成が基礎研究から技術革新に至る一連の研究を切れ目なく

支援できるようシステムを確実に構築をしたいと考えています。「政府は、国際的に見て自由にトップレベルの研究が行われる環境を構築することを望んでいる。グローバリゼーションが進展する中、これはスウェーデンの競争力を維持発展させるために不可欠なことである。」と Lars Leijonborg 氏は述べています。

さらに Lars Leijonborg 氏は「Madeleine Sandström 氏がこの任務を引き受けたことを喜んでおり、様々なスウェーデンの研究助成機関で培ってきた彼女の堅実且つ幅広い知識はこの任務に適切だろう。」とも述べています。

最終の調査報告書は、来年の 3 月 28 日に公表されることになっています（真栄城 利江）。

（参照：6 月 20 日の教育・研究省のプレス発表。スウェーデン語）

<http://www.regeringen.se/sb/d/9205/a/84517;jsessionid=ai-XGDaj5PLh>

Anders Flodström 教授が高等教育庁の長官に

1999 年以来、学長として王立工科大学 (KTH) を率いてきた Anders Flodström 教授が、学長職を辞し、2007 年 8 月 1 日から 2011 年 9 月 30 日まで、スウェーデン高等教育庁の長官 (University Chancellor) に就任することになりました。同庁は、高等教育機関の質の評価・管理、高等教育システムの評価分析等スウェーデンの高等教育機関に関することを担当しており、Flodström 教授は「大学の発展のために高等教育庁の活動の範囲を広げるとともに、同庁の評価が大学をよりよい方向に導くようにする」と抱負を述べています。

Leijonborg 教育・研究大臣は、Flodström 教授が長官就任を引き受けてくれたことを喜び、「Flodström 教授は、大学の質に対して明確な考えをもっており、精力的で、大学に対して高い質を要求する精神力をもつなどいくつかの優れた特性を持っており、この役職に適任である。政府はスウェー

デンの大学の教育研究が国際的な競争の中で促進するよう努力しており、同じ視点をもつ長官を持つことが重要である。」と述べています。

なお、新しい王立工科大学の学長は以下の過程を経て選ばれることになっています（大月 光康）。

1. 副学長 Anders Eriksson 教授が 8 月 1 日から新学長が就任する来年の 1 月 1 日まで暫定学長。
2. 新学長の候補者は 9 月 5 日に公表。
3. 学長指名委員会の最終投票結果が 10 月 19 日に大学の役員会に示される。
4. 10 月末までに大学の提案を政府に提示する。

4. 北欧学術機関の紹介

Swedish Foundation for Strategic Research

スウェーデンには複数の公的研究機関及び助成機関がありますが、今回は 4 月 13 日に訪問した Swedish Foundation for Strategic Research (SSF、スウェーデン戦略財団) について、Lars Rask 教授 (Executive Director)、Ms. Ann-Katrin Croon (Director) と Joakim Amorim 博士 (Scientific Secretary) からいただいた情報をもとに紹介致します。

1. 概要

SSF は 1994 年に当時の政府からの基金を基に設立された、研究者への直接的ファンド等を通して、長期的・戦略的に取り組むべき研究を支援する戦略研究財団です。1994 年当初の基金は 60 億クローネ (日本円にして約 780 億円。1 クローネ=13 円換算) でしたが、2007 年の基金総計は約 110 億クローネ (約 1,980 億円。1 クローネ=18 円換算) に増加しています。研究支援費は約 99% が研究者個人または大学へ支給され、そのうち約 20% が若手研究者に支給されています。現在、理事会には 11 名のメンバーがおり、大学や研究機関、企業に所属する研究者で構成されています。SSF が定める戦略的研究分野は ① Biotechnology, drug discovery and development, medical technology/bioengineering ② System, information and communication technology ③ Material development ④ Process and production technology の 4 つで、エネルギー開発や環境科学分野への支援事業はなく、それらの分野に関しては別の助成機関が支援を行っているそうです。

2. 事業

2007 年 5 月現在、15 のフレームワークの中で 60~70 の研究グループが研究費の支給を受けています。PhD の若手研究者は年間最低 300 万クローネ (2 年間で約 5400 万円。1 クローネ 18 円換算) の支給を受け、40 歳以下の中堅研究者は 6 年間で 900 万クローネ (約 1 億 6200 万円。1 クローネ=18 円換算)

の支給を受けています。また、シニア研究者に対する研究経費は総額 1000 万クローネ (4~5 年で 1 億 8000 万円。1 クローネ=18 円換算) で、シニア研究者からの申請件数は約 500 件で、そのうち 20 件の研究が採択されています。

3. 審査制度

SSF が研究費を支給する研究課題は、①科学的に優れていること、②商業化が可能であることの条件を満たさなければなりません。②についての評価は非常に難しく、適正な評価を行うために複雑な評価システムを採用しているそうです。評価委員会は、SSF の理事会や事務局とは全く別に存在しており、審査員の約 40% がスウェーデン人、残りの約 60% が外国人で構成されています。いくつかの事業については、書類審査、面接、そして外国人による審査と様々な方法で審査が行われており、SSF の事務局はこれらの複雑な審査体系を確立するのに膨大な労力と時間を割いてきたとのこと。

4. 事業全体の焦点

近年、全ての事業において焦点が置かれているのが ①若手研究者の育成、②新研究領域への挑戦、③女性研究者の地位確立であり、若手研究者向けの事業の実施や、新研究領域への情勢にも力をいれているそうです。スウェーデンでの PhD 研究者のうち、女性の比率は約半数に達しており、若手研究者内の女性の比率も年々増加しているとのこと。現段階では女性教授の割合は未だ低いのですが、今後徐々に多くの女性研究者が教授等のポジションを獲得していくと予想しているそうです (真栄城 利江)。

5. 雑記帳

スウェーデン生き物日記（1） カラフトアツモリソウ

アメリカに「セサミストリート」という TV 番組がある。ぬいぐるみの人形が、前後の脈絡のない話を展開し、幼児には人気がある。その出演者（？）のひとりに「カウンティング」というおじさんがいて、なにかというと「1, 2, 3」と数えはじめる。子供もつられて指折り、数えることになり、なるほど、と思った。

文明は数えることから始まったという。「物をより分けること、それから数えること」が基本だからだろう。現代でも同じで、分類学、統計学などは、それらが高度に発達したものと言えようか。

例えば「地球の表面積は 5.1 億 km^2 、そのうち陸地は 1/3 の 1.5 億 km^2 で、植物が生育しているのは陸地の 1/3、0.5 億 km^2 。人類を含むすべての生き物は、その植物に依存して生活している...」。カウンティングおじさんではないが、こうした数字なしには私たちの生活はなりたない。

地球上には 45 万種類ほどの植物が生育している。日本には約 5300 種、スウェーデンにはその 1/3 にあたる約 1600 種が記載されている。ついであら、そのうち生存を脅かされている危急種は、日本で 17%、スウェーデンで 23%。人間活動による生息環境の悪化が、その主な原因とされる。全世界的な環境変動が実感される。

植物の分類は 18 世紀にリンネによって確立された。スウェーデンの誇る植物学者であり、二つの業績が知られる。おしべの数による植物の系統分類、ラテン語表示による生き物の命名法（二名法）。特に後者は現代生物学の基本となっている。肖像が 100 クローネ紙幣にデザインされており、できればは上々。スウェーデンがユーロに移行しない理由はこれだ、と笑いながらいう人もいた。

2007 年 5 月 23 日は生誕 300 年にあたり、ウプサラ大学中心に記念行事がとりおこなわれた。各国の要人としては、天皇、皇后両陛下が唯一参加され、スウェーデン国民は幸せいっぱい。会う人ごとに「私のためによろしく伝えてね」と（勿論、冗談だけれど）嬉しそうだった。

＊

赤ん坊のリンネがむずかる時、花を与えるとおとなしくなった、という。伝説だろうけれど、5 月、6 月は植物が一斉に開花する。幼時の花体験が後年のリンネを作った、とつい信じたくなるようなうらかな日が続く。カラフトアツモリソウ（Lady's slipper）が咲いているよ、と言われ、早速、観察に出かけた。林床に点々と豪華な花をつけていた。日本でもヨーロッパでも、絶滅危急種の代表である。

（佐野 浩）

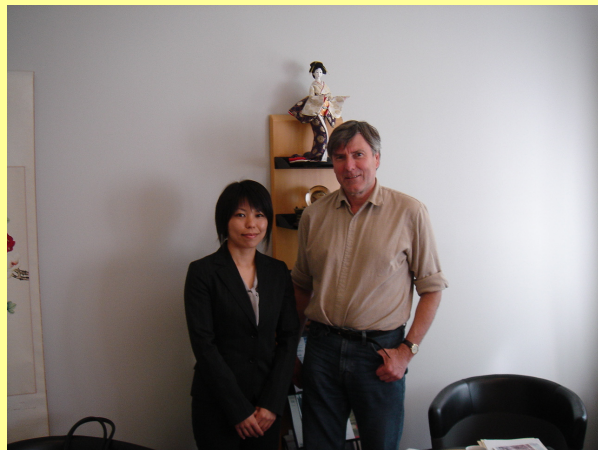


コラム「ストックホルム大学」

今年度4月16日にStockholm Universityの国際企画担当上級顧問のAke Nagrelius氏を訪問する機会がありましたので、Stockholm Universityについてご紹介したいと思います。

ストックホルムでは、大学が分野別に住み分けしており、医療分野をKarolinska Institute、理工系分野をRoyal Institute of Technology (KTH)、社会科学、化学、生物学分野をStockholm Universityが中心となって研究を行っています。Stockholm Universityはストックホルム市内にキャンパスを構える大学で、学生数は学部学生が3518名、大学院生が1800名、職員数が4100名規模の大学です。スウェーデンでも先端の研究を行っているのが経済と化学分野で、またストックホルム市内の大学では最も日本語学科が充実している大学の一つでもあります。

日本の大学との交流では、東北大学、中央大学、東海大学、日本大学及び北海道東海大学等との交換留学事業を行っており、日本からの留学生はそれらの大学トータルで約10名を毎年受け入れているとのこと。今後は協定を締結している大学との更なる交流を目指して事業の活発化を計る方針のようです。日本との合同事業で、特に力を入れて行っているのは生物物理学のような世界でも日本が得意とする分野において、共同研究を行う等の国際事業であり、その際の困難な点としては「①組織が大きい日本の大学では、学内で協定締結を合意するまでに時間がかかる点。②スウェーデンの研究者が日本での研究に興味を持ったとしても、日本への接点（受入研究者や共同研究者）がなければ、日本で研究することは難しい。米国や欧州のように、研究に関する接点がなくても、研究者を受け入れる体制が整っていない点。」と貴重なご意見もいただきました（真栄城 利江）。



Mr. Nagrelius と執筆者



日本の大学情報は誰でも自由に観覧できる。

国際協力員からのご報告

4月1日より国際協力員として琉球大学から派遣されております真栄城（まえしろ）と申します。ストックホルムへ来て早くも3ヶ月が経過し、海外生活の体感時間の短さを日々実感しております。沖縄とは全く異なる気候や環境での生活を心配してくださる方も大勢いますが、日々色を変えるストックホルムの自然や街並、空の色の美しさに魅了されて、すっかり馴染んで生活しております。

昨年度まで2名体制だった国際協力員も今年度は1名となりましたが、センターのスタッフ全員に助けられて業務を行っております。学術研究、大学の国際交流に関する情報収集はもちろん、充実した社会保障制度やなど、日本との比較をしながらスウェーデン社会についても研究したいと考えております。

来年3月末まで、皆様に楽しんで読んでいただけるような記事を書けるよう、情報収集、工夫して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



スウェーデン料理の定番

「ピュッティ・パンナ（ポテトと豚肉の炒め物）」

監 修：佐野 浩（センター長 E-mail:h-sano@jsps-sto.com）
編集長：大月 光康（副センター長 E-mail:m-otsuki@jsps-sto.com）
編集担当：真栄城 利江（国際協力員 E-mail:gakushin2@jsps-sto.com）
執筆：佐野 浩、大月 光康、真栄城 利江



日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

JSPS Stockholm office -Retzius väg3, S-171-77 Stockholm, Sweden-

TEL +46 (0) 8 5088 4561 FAX +46 (0) 8 31 38 86

<http://www.jsps-sto.com>